MONTHLY

アフリカ NOW

vol. 38

チャド北部のトゥルバ村で。撮影 壽賀一仁

CONTENTS

アフリカは今ーチャド・エチオピア ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2～5
あのＮＧＯは今 ーセネガル ーENDA-graf ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
ジョン・ウィルソンの日本旅行記❻ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8～9
西アフリカの藍染めと泥染め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10～12
会員フォーラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13～15
お知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

1998年 6月15日発行
発行責任者：吉田 昌夫　　編集責任者：尾関 葉子
印刷協力：渡辺 吉宗 & 吉印刷株式会社
発行：アフリカ日本協議会　〒 101-0054
東京都千代田区神田錦町2-9 西野ビル
TEL 03-5281-3424 FAX 03-5281-3425
E-Mail : PXC06143@niftyserve.or.jp

定価 500円

アフリカは今

チャド・エティオピア

～ネットワーク調査中間報告④～

1997年度のネットワークは3地域に渡っておこなわれた。その3番目の目的地、チャドとその前後にトランジットで訪れたエティオピアをご紹介したい。ネットワーク調査全般については、5頁に詳しく書くこととして、この頁では、2つの国の生活の様子や再会したゲストたちのことをお伝えしたい。

（文責：尾関葉子）

いよいよチャドへ

アフリカ・シンポジウムでゲスト8人の国を訪れるという約束を果たすべく、ついに8番目の国チャドを訪問する。

アディス・アベバは始発空港である。エティオピア航空はアディス・ンジャメナ・ニアメ・バマコ・ダカールと、東アフリカから西アフリカへ5ヶ国間を週に2往復飛んでいる。ンジャメナの空港はメッカ帰りの人でいっぱい。文字がかけない人には、審査官が代筆したり、字がかける人が積極的に手伝っている。老人が来ると、それまで順番を取り合いしていた若い乗客がさっと順番を譲っている。

早くもハルマッタン

今年のンジャメナは、ハルマッタンが早いらしい。あちこちで砂埃が舞っている。ガスか霧がかかっているような風景である。ドアを閉めていても、どこからか埃のようにうっすらと細かい砂が積み上がる。

PACのマークと会う

宿泊先のミッション・カバラヤで休んでいると、元PAC（Partnership Africa Canada）の事務局長マーク・ラポルテ氏と奥さんのキャロルがやってきた。彼も93年のアフリカシンポジウムに来日し、AJF設立の時にその枠組みを作り上げる為にカナダを案内してくれたり、サポートをくれた一人である。その後、英国系の団体ACORDのチャドプロジェクトの代表をしている。少しやせたようだ。でも、元気だった。

ゴス氏と再会！

緑のサヘル事務所でゴス氏に会う。到着したその日のうちにゴス氏と会えるとは思っていなかった。緑のサヘルで働いている坂井真紀子さんから彼はとても忙しいらしいと聞いていたからだ。あいかわらず背が高い。1993年以来なので、実に4年ぶりである。あの時は、裏方の仕事で忙しくてほとんど話す機会のなかったゴス氏と私であるが、帰国後、ゴス氏が「まるで違う星に行ったようだ」と日本のことを話していたそうだ。

当時国際NGOケアに所属していた彼は、ケアのチャド撤退と同時に、自分でNGOを設立した。その団体ACODEは全員が無給で、各自が持っている知識や経験をつかってセミナーをひらいたり、地域へのサポートをしているという。ゴス氏を初め各自がコンサル業務などで資金を集める。

「チャドは何もないテーブルだ」チャドの話を始めると、いきなりゴス氏はそう言った。物はすべて外国から来る。たしかに、食料加工品や食器や石鹸、ガソリン、トイレットペーパー、

砂糖、たばこといった日常生活に必要な物はすべて、近隣のカメルーンやナイジェリアから来る。

近隣の外国と言ってもンジャメナ市を流れるシャリ川の向こうはもうカメルーン。川向こうに親戚のいる人もいて、行き来は比較的自由らしい。坂井さんの話では、「いつだったか、ンジャメナで砂糖が値あがりしたことがあって、その時はおばさん達が皆カメルーンに行くんだけど、太って戻ってくる。街の税関にみつからないように、服の下で身体中に砂糖の袋を巻き付けて帰ってくるのよ」なんとも笑えない話である。

ゴス氏は最近、退役予定の軍人へのワークショップを行っている。軍を辞めたらどうなる？村にも行き、村人が自分たちをどう見ているのか、ビデオやレポート作成を通じて、考えさせる必要があると力説する。

チャド北部の村トゥルバへ

チャド北部のトゥルバ村で、緑のサヘルが植林プロジェクトをおこなっている。訪問させてもらうことになった。トゥルバはかつてはチャド湖沿岸に位置していたが、今ではチャド湖の水位が低くなってしまい湖からはかなり距離がある。

4WDにのって6時間ほど。「道に迷ったみたい」と菅川さんがぽつりという。いつもなら通らないチャド湖のほとりにでてしまったという。さらに、走ること数十分、いきなり変なバキッと言う音がしたと思ったらパンクであった。しかも、2つも。

仕方ないので、車から降り、タイヤ交換を見ながら休むことにする。日が暮れる。

道に迷う、パンクする。「これで象が来たらフルコースだよ」と菅川さんに元気づけられる。

トゥルバ到着は夜になってしまった。次の日、村を歩くことにした。出かける前に、プロジェクトのコーディネーターであるムスタファさん自慢のコレクションを見せてもらう。(写真左下：白黒なのが残念！)ほとんどが、ナイジェリア製だという。

トゥルバ村では定期的に市がたつ。売りに来る人は毎回同じ場所に店を出す。植林プロジェクトの苗木を市場の持ち場の前に植えた人も多い。中には飲み水のちょっとした余りだとか昼の弁当の時に手を洗った後の水だとかをこまめに植木にあげている人がいる。そういう人の木は、他の人より群を抜いて大きく成長している。3メートルから4メートルに成長すれば、あとは自力で大きくなれるのだが、それまではこまめな水やり、つまり人のケアが必要となる。

（写真上：途方にくれる二人）

植林は長い目で

1980年頃この地域に大旱魃があり大規模な援助があった。当時、別の団体が植林を大々的におこなった。その後この団体はトゥルバから撤退。その団体によると、莫大な金額を投入したにも関わらず植林プロジェクトは失敗したという評価を下したという。

が、現在同じ場所で植林プロジェクトを行う菅川さんはそう思わない。撤退後も何本か木が残った。何年もたって村人は植林がどんな成果を生むのかを知った。枯れてしまった木も多いが、残った木は大きく生長し村人の憩いの木陰を作っている。18年前の“失敗”した植林事業は、間違いなく現在のプロジェクトの成功に繋がっている。環境保全に対する理解は長い時間を必要とする。「4、5年で答えはでない」現場の声は聞き逃せない。

～エティオピア～１月のクリスマス

正月のおとそ気分もどこへやら、1月3日に成田から香港・ドバイ経由でエティオピアに向かう。チャドのビザは日本では取れないので、直行便がでるアディスアベバをトランジットに選んだ。パリよりは、慣れている国というのがもう一つの理由でもある。

折りしも、街はクリスマス一色。えっ1月なのに？と思われる方もいるかもしれないが正真正銘1月の話。1月7日、エティオピアでは、クリスマスを迎える。

1年が13ヶ月あるこの国のカレンダーでは、13ヶ月目の西洋暦1月前半にクリスマスが来る。

1月6日がいわゆるクリスマス・イブであるが、この日に人々は羊を買い求めクリスマスのごちそうを作る。街のあちこちで羊の臨時市が発つ。そこだけまるで年末の“アメ横”（東京、上野にある）のような賑わいである。通常であれば、車など素通りする場所なのに、この日だけはタクシー、乗用車が二重、三重に路上駐車する。

聞けば、エティオピア全国の村々から羊追いと呼ばれる人が羊を追い立てて、何日も歩き首都アディスアベバに連れてくる。羊にも名産地があり、どこどこ村の羊は肉がやわらかいとか、においがきついといった品比べがあるらしい。

エティオピアのおよそ半分の人が信仰するコプト教（キリスト教の一派）には、ツォムと呼ばれる『断食』の曜日がある。水曜日がそれに当たるのだが、通常だと、その日は肉や卵を食べない。ところが、今年は1月7日、クリスマスの日が水曜日と重なり、どうなるんだろうとよそ者の私は密かに心配していたが、『今日（1月6日火曜日）がツォムになる』だけと、けろっと言われてしまった。日本の振替休日の感覚である。

イブの日は職場も午前で終わるところが多い。今日ばかりは、セダンタイプの車より、ピックアップ型の車を持っている友人が人気者になる。荷台に羊をのせて運ぶからである。

クリスマスの翌日はもう通常の生活に戻ってしまう。唯一の名残は、昨日のごちそうの羊の皮の山である。絞められた後、皮を買い取ってもらう。街の辻々に山積みされているぺらぺらの毛皮をみてると、フィレとか、ロースといったのが肉だと思っている日本よりも、ずっと自然のサイクルが大切にされている、と思ってしまう。

（日教組教育新聞 2273 号に掲載された原稿を元に書き直しをしています。）

前（37）号でエティオピア航空がエリトリア線の運行を中断しているというご報告をしましたが、ついに、エリトリアとエティオピアの紛争が表面化してしまいました。もともとエリトリアの独立の際に、エティオピアとの国境線を明確にしていなかったという話も、直接の原因となった土地の面積は大きなものではないとか、この問題の複雑さもうかがわせます。

爆撃を受けているメケレ（エティオピア側）や、アスマラ（エリトリア側）では被害がでていますが、エティオピアの首都アディスアベバや他の地域は日常生活への影響は深刻ではないようです。新聞だけ見ていると、エティオピア全土が戦争に巻き込まれていたり、エチオピア中から、人がアジスアベバに逃げてきているような印象を持ちますが、実際に避難してきているのは、被害を受けている場所にいる人々が殆どのようです。

一番気になるのは、アフリカの紛争が日常茶飯事のような印象を多くの人がもつのではないか、ということです。外側で作られるイメージと、現実では状況が全く異なるものかもしれません。最近では、新聞だけでなく、インターネットなども気軽にアクセスできるようになりました。与えられる情報だけなく、自分で情報を集めることに力を注ぎたいと思います。

～お知らせ～

37号の囲み記事でご紹介したエリトリアで法整備に参加していた土井かなえ様から連絡がありました。ケニアの難民キャンプのあと、エティオピアにはいり、そこでストにあったものの、37号の会報が発行された頃、エリトリアに無事戻られたそうです。

なお、その後エティオピアとの紛争前にエリトリアを離れ、今は帰国途中です。帰国されてからのエリトリア報告をお約束下さいました。皆さんご期待下さい。

<<ネットワーク調査の背景、目的と概要>>

1997 年度の活動の柱のひとつ、ネットワーク調査は、昨年度3回に渡っておこなわれました。これまでの調査は、日本ツアーと"セット"になっておこなわれていた為、調査に直接参加していない会員へも、活動が比較的わかりやすかったのではないでしょうか。しかし、1997 年度の調査は、日本ツアーをおこなわず、現地でのワークショップ開催と聞き取り調査に活動を集中させた為、かえって会員には『見えにくい』ものとなってしまったかもしれないとは、運営委員会でも感じています。上記を踏まえ、あらためて、ここにネットワーク調査の企画背景とその概要をお伝えしたいと思います。 (文責: 尾関葉子)

AJF設立と第一フェーズ

1993 年10月、日本政府主催によるアフリカの開発のための政府間会議「第1回東京アフリカ開発会議(TICAD I)」が開催された。会議にあわせて、アフリカの開発に係わるNGO・研究者・市民によるアフリカシンポジウム「アフリカは今: 地域自立に立ち上がる人々」が開かれた。このシンポジウムが契機となり、それまで個別ばらばらに活動してきた日本のNGO・研究者・市民が経験交流と相互連携を密にし、アフリカの現地NGOおよび現地・欧米NGOネットワークスと連携していくことを目的とするネットワーク団体としてアフリカ日本協議会(AJF)は設立された。

これまでのテーマ

AJF設立後3年間(1994-96)は、関心を持つ人々の裾野を広げるため、日本にアフリカを伝えるセミナーを日本向けの主な活動としてきた。また、それにはまずアフリカの人々やNGOの開発の取組をより深く広く知ることが必要であると考え、その為の現地調査をアフリカ向けの主活動とした。

具体的には、アフリカが抱える諸問題と地域に焦点をあてて現地調査をおこなった。それぞれのテーマは、**官民協力**(南アフリカ、1994 年)**紛争解決・復興**(ルワンダ、1994 年)、**砂漠化防止**(西アフリカ3国、1994 年)、**協同組合・女性支援**(ジンバブエ、1995年)、**食と環境**(セネガル、エティオピア、1996 年)である。

人々のキャパシティ・ビルディングへ

これらの調査によって、アフリカの諸問題は、単に技術的な問題にとどまらず社会環境、さらにはヒューマン・セキュリティという概念と密接に連関していることを深く理解するに至った。特にアフリカの草の根の人々の生活基盤を脅かしている環境問題に関しては、1996 年度の『食と環境』の一連の事業を通じて、次のような認識に至った。

サハラ以南アフリカでは、人々の生存の基盤を脅かす沙漠化(土壌劣化)を防止し、持続的な生活改善を進めていくために、地域の住民や CBO、NGO が環境保全活動に取り組んできている。そして現在では、植林等の技術的アプローチのみならず、地域を取り巻く制度や政策といった社会環境を改善するための取組がなければ問題解決にはつながらず、また地域住民自身が活動の中心的担い手とならなければ成功しないという共通の認識が広まりつつある。これらの真剣な取組は各地でそれなりに成果を上げつつあるが、その多くはそれぞれの地域・人々がお互いの経験や情報を交換して学びあうことなく、個々バラバラに努力を積み重ねている感が強い。砂漠化のより一層の進行に脅かされる現在、人々がこれらの活動を更に発展させ、草の根の生活の場において具体的な成果を上げていくためには、各地で個々に成果を上げつつある住民主体の環境保全活動の経験交流と学びあいのためのネットワーキングやトレーニングの充実が、当事者である地域住民やCBO、NGO の課題対処能力向上(エンパワメント)のために最も必要とされている。

こうした活動によって、草の根の開発に取り組むアフリカの現地NGOおよびNGOネットワークスとの関係拡大・強化、セミナーや報告書等を通じた調査成果の日本国内での幅広い共有など、一定の成果を確実に上げてきたと信じている。

1997 年度ネットワーク調査へ

それまでの活動に基づく上記の認識を踏まえ、運営委員会では、「草の根の活動における各地での個別の適正技術や成果、失

敗も含めた経験をトレーニングやネットワーキングを通じてどうお互いの現場の具体的な取組に還元できるか」という課題への取組みを実行することを 1997 年度の活動の柱とした。これは、1998 年度で終了する第一フェーズの総括でもあり、99 年度以降に始まる第2フェーズにつながるものとして位置づけている。

期待される成果

この調査成果として期待されるものは、トレーニングやネットワーキングの方法論やその効果に関する情報共有があるが、スタッフの能力向上という面も含め、アフリカ・日本双方の今後の NGO 活動に大きく貢献できるものだと信じている。

また、今後のAJFのアフリカへの直接支援の方向性を考える点からも意味のあるものだと考えている。

具体的な調査地、調査方法

過去に実施した調査により現地 NGO との関係と情報の蓄積があり、また各種のトレーニング及びネットワーク型 NGO が活動しているジンバブエとセネガルを調査の拠点国とした。またトレーニングの機会等へのアクセスが少ない事例の調査対象国としては、調査の足がかりとなる現地 NGO とのコンタクトがある(1993 年 10 月のアフリカシンポジウム参加 NGO)点を考慮して、チャド及びザンビアを取り上げた。

この4ヶ国において環境保全活動に関わるトレーニング及びネットワーキングにつき、以下の調査を実施した。

○生活向上の為の様々な活動に取り組んでいる地域住民やCBO、NGOにおける能力向上のニーズ、トレーニングやネットワーク機会へのアクセスの現状、その効果等。

○トレーニングやネットワーキングの機会を提供している NGO におけるプログラムの内容、情報の蓄積と利用状況、現場の活動への効果、フォローアップの現状等。

○トレーニング参加機会と生きた経験・情報の蓄積および普及については、広いネットワークを持つことの重要性に着目して調査した。

今年度は、調査のフォローアップとして、4ヶ国の団体と、収集した資料、報告書たたき台を共有しながら報告書作成する。調査報告書は調査対象国の関連 NGO はもとより、AJFと関係を持つアフリカ、欧米、日本 NGO に広く配布し、成果を共有する。こうした成果の共有は、アフリカとアフリカに係わる日本双方の今後の NGO 活動の深化と、活動に参加するスタッフの能力向上・人材育成に大きく貢献するものと運営委員会では考えている。

<<番外編>> もうひとつのチャド報告～終わらないチャドの旅～

1月18日(日)の午前5時の飛行機でアディスアベバに帰る予定だった私は、前日までにリコンファームを済ませ、当日は3時間前から空港に行き、チェックインを済ませ、ボーディングパスを受け取り、見送りの緑のサヘルの人たちと別れた。待合室で待つこと数時間。飛行機が到着する。待っていた乗客10数名が乗り込もうと、ビルから出ると、全員戻れという合図。なにやら外が騒がしい。しばらくすると制服を着たポリスが「deux(2)」と言う。2？二人？と一瞬考え、あっと思った瞬間には、私の前にいた金髪の女性が同僚の男性の腕をつかみ、ドアをあけてビルの外にダッシュしていた。後に続こうと私も含めた他の乗客が走ったが、ドアは外側からポリスに閉められてしまった。何？何なの？説明もないまま、しばし呆然としている私たちに、先の女性はちらと振り向き手を振ってくれる。二人が自分の荷物をチェックしてタラップを上がり、機内に消えたとたん、飛行機の扉は閉まってしまった。残された私たち。 目の前の滑走路をエティオピア航空は滑るように飛び去っていった。

ニジェールの高官が予約した数以上のお供をむりやり搭乗させたとか、エティオピア航空がンジャメナから搭乗する乗客の数を間違えて伝えたとか、あとからはいくらでもうわさがたつ。それにしても、ボーディングパスをもらったのに置いてきぼりをくうなんてなんて前代未聞。(あの旅行会社道祖神にも信じられないと言われてしまうほどめずらしい。)しかも次のアディス行きは金曜日。明日(月曜日)から始まるPACのワークショップが終わってしまう！

他の"仲間"たちと一緒に、バウチャーをもらい、緑のサヘルのスタッフやACORDのドライバーと共にホテルに向かう。"仲間"の殆どは、アディスアベバがトランジットなので、別の航空会社に変更して、水曜日までには皆ンジャメナを発った。金曜日のフライトはいっぱいですと言われた私は、最後の1週間をチャドで1・2を争う高級ホテルに滞在し、毎日エティオピア航空に通うはめになった。せめてもの救いは、エティオピア航空の地上スタッフが親切でハンサムだったことくらいかも。(尾関葉子)

あの
NGOは今

ーセネガルー
ENDA-graf（エンダ・グラフ）、その後

楠田一千代

アフリカ日本協議会は、1996年度に引き続き、1997年度もセネガルに本部のあるエンダグラフと共同で現地調査を行なった。

＊ENDAは1972年にUNEP（国連環境計画により設立された国際NGO。西アフリカだけでなく、他のアフリカの国々、アジア、中南米でも活動を展開。grafは「ENDA研究行動研修グループ」の略で、75年に開始されたプロジェクトが発展したもの。

1996年には、約600だった村レベルでのグラフのパートナーグループは、今では約1000に増加し、ますますその活動は多様化していた。今回はセネガルの首都ダカール近郊の、いわゆる都市部における支援活動を訪問する機会があった。

ダカール郊外、ピキンで行なっているさまざまな活動を訪問

エンダグラフは、ダカールの下町、グランヨッフに本部を構えるが、近郊都市のピキンやゲジャワイなどにも拠点を持っている。ピキンでは、女性グループが行なっている少額の貯金貸付け活動の総合金庫がその場所となっていた。ここで、グラフはこの金融活動のほか、身体障害者グループの活動にも支援していた。ピキン近くのジャマゲンでは、エイズ啓蒙活動を行なうグループの野外劇と歌に列席できた。演技を通してエイズに関するメッセージが伝えられるこの活動にもグラフは支援している。

同じく近郊の、ゲジャワイ事務所はネットワークの核

ゲジャワイ事務所は、町の入り口付近にある2階建て。昨年12月に訪問した時には、移ったばかりで、机と椅子が置いてあるだけだったが、すでにゲジャワイで活動する種々のグループにとっては貴重な会合場所となっていた。人々が集い、出会い、活動を始める所。グラフの職員は情報源となり、事務所は核となってネットワークができる。

ゲジャワイでは近年都市化の影響で、治安が悪化しており、それに対して青年グループが、パトロール活動をしている。青年たちが、ひとつの目的のために集まり、行動する機会を持つことで、自ら経験を積み、他の課題にも取り組めるようになっていく。いわゆるエンパワーメントの実践である。

事務所で突然の申し出を受けて…

このゲジャワイ事務所を訪ねた時に、グラフの職員で1996年の食と環境セミナーにも来日したママドゥ＝ンジャイ氏に言われた。「どうだ、ゲジャワイ事務所の家賃を出さないか？ AJFがセネガルに来た時にはAJFセネガル事務所として使ってくれていいから」月10万セーファーフラン（約23,000円）という。「AJFで相談してみる」と返事をして戻ってきたものの、今のAJFにそんな余裕はない。運営委員会の結論は、AJFとしては支援できないが、個人の名でAJFの会報などを使って会員に呼びかけてみてはどうか、支援したいという人が集まって新しいグループを作るきっかけになるのではないか、というものであった。それを受けて、私は「現状では無理。仲間を募るなどして他の方法を考えてみる」とグラフに連絡した。そして……。

この原稿の締め切り直前、ママドゥから返事の電子メールが届いた。

「AJFの会員数人がお金を出し合って家賃を負担してくれても、長期的支援にはなり得ないから私は望まない。AJFの元々の使命に沿うものでもないし。自分たちで協力しあってなんとかする」というものだった。現地への直接支援について考えさせられる1件であった。

ピキンの町並み。ゲジャワイはピキンよりは小さいが、ダカールまで乗合バスで約70円という便利さもあって、近年拡大している。

連載 ジョン・ウィルソン氏の日本旅行記 ❻

- journey to Japan -

1996年1月19日

私たちは広島での滞在を終え、名古屋に向かった。アフリカ日本協議会の代表理事の吉田昌夫さんが出迎えてくれた。そして福岡のグリーンコープに似た消費者協同組合の関係者とともに知多に向かった。

私たちが訪ねたのは南知多村の農民、杉浦剛さんの家だった。彼は政府が行なっている減反政策について話してくれた。

「20年有機農業をやってきて、最近やっといい農法を確立できたと思った。けれども政府はアメリカからの圧力で、米の生産を減らそうとしている。増やしたくとも状況が許さない」

杉浦さんの農場を見た後、私たちは協同組合を訪問した。そこでは非常に近代的なやり方でイチゴが栽培されていた。

1月21日

名古屋に戻って、セミナーに参加した。そこで私は、数枚のスライドを見せながら報告した。シトレ（クリスティーナ・ツァンガニジ）さんがチマニマニでの女性の活動について話し、モヨさんはORAPについて説明した。

その後3つのグループに分かれ、それぞれのグループに私たちの1人が入って、質疑応答を行なった。そのやり方は非常にうまくいったと思う。参加者の多くはアフリカに行ったことがあり、また消費者協同組合の関係者も多かった。

1月22日

翌日、私たちは京都に向かった。セミナーまでに時間があったので京都見物をすることができた。古いたたずまいの中を散歩し、非常に楽しい時間を過ごすことができた。

夜のセミナーでは47人という一番多くの参加者が集まった。私たちもそれまでよりうまく話せたと思う。シトレさんと褒め合った。

1月24日

東京に向かう。その途中、京都には行かずに別行動で静岡にいたモヨさんが合流した。東京に着くと、どこをどう行ったのかはっきりはわからないが地下鉄を乗り継いで、宿泊先のホテルに着いた。

1月25日

次の日、私はボランティアの篠崎さんと、BMW協会を訪問した。BMW（バクテリア・ミネラル・ウォーターの頭文字からとっている。九州の豚舎を訪問したときに見せてもらった。）の成分とどこでどうやって使われているのかについて話を聞いた。工業廃水を浄化するためや家畜の排出物の処理に使用されるという。

それから秋葉原にちょっと寄った後、グローバル・ビレッジを訪ねた。以前ハラレで会ったことのあるサフィア・ミニーさんと村田さんに会うためである。その夜私は事務所を兼ねたミニーさんの家で、グローバル・ビレッジのボランティア数人と環境関係の雑誌社から来た記者と共に夕食をご馳走になった。その記者はフリーランスで、NGOのためのトレーニングを開催する予定だと話していた。

1月26日

翌日、今はゲストハウスとして使われている、築200年のわらぶき屋根の家まで、グローバル・ビレッジの職員が私を送ってくれた。そこでは日本中近東アフリカ婦人会が主催するパーティーが開かれていた。すでに来ていたモヨさん、シトレさんと共に、私は低いテーブルの周りに日本式に座り、伝統的な正月料理を食べた。食事が終わると昔からの玩具で遊んだ。私は剣玉に夢中になった（あまりにはしゃぐので、次の日に日本の玩具のセットをプレゼントされた）。

その後ホテルに戻り、翌日のセミナーについての打ち合わせを行なった。それは3時間に及んだ。

1月27日

セミナーの当日。ボランティアが私たちをホテルに迎えに来てくれ、会場に向かった。こぎれいないい会場（注：東京ウィメンズプラザ）である。吉田さんの開会の挨拶でセミナーの幕が開いた。

私は担当したジンバブエの概況報告で、「食料生産と環境」に関係するいくつかの論点に基づいて話を進めた。

まず人口分布図を見せ、いかに人々

が共同体の土地に集中して住んでいるかを示しながら、土地の分配が重要な問題であることを説明した。その後で、季節的な降雨がある気候と年中湿った気候の異なった特徴を示すいくつかのスライドを見せ、過去においていかに家畜の管理が重要であったかについて話をした。

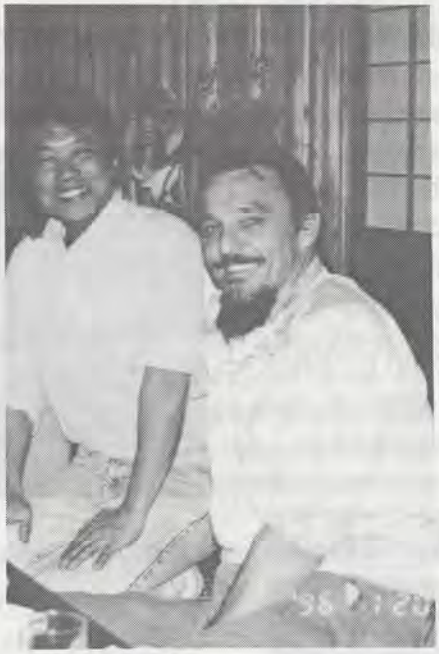
その後、昼食をはさみ、各地での講演会と交流の様子が伝えられた後、トークが行なわれた。日本文化の印象について質問を受けたモヨさんが、「近代的なのだが、どこかに変わらないものを持っている」と答えた。

その後のシトレさんのコメントにも、日本社会に関してネガティブな部分が全くなかったのが残念だった。すべてがバラ色というわけではないはずだと思うのだ。

続いて大野さんが日本の農業の現状について語った。彼は農業の分野のジャーナリストとして長い間活動している人である。

「私たちは日本についていい話をしていたが、ここで農業に関して現状のもう一方の面について話をしたいと思う。農業に従事している人の6割が60歳以上。またその数字は2000年には80％になると予測されている。日本では農作物の47％しか国内で生産していない。穀物ではたったの30％だ。農地はますます荒廃化している。日本の農業は破壊され、もはや立て直すことが不可能なところまできている。

戦後、農業の近代化が始まった。まず精神的、社会的な面が近代化された。その際、伝統的な歌や踊りがなくなってしまった。人々がそうしたものはもはや今の時代に合わないと感じだからだ。薪の変わりにガスを使い始めた。そのため現金が必要になる。そして、機械や化学肥料、そして温室のような大きな施設がどんどん農村に入ってきた。彼らは生活様式を失った。今、人々とエコシステムとの間に新しいリーダーシップが必要だ」



左は杉浦剛さん

大野さんの話の後、シトレさんの番が来た。非常にうまく、情熱的な語り口で、協力における武勇段の一部始終と、それがどうして悪い方向に行ってしまったかについて説明した。

その後、尾関葉子さんがファシリテーターで、村上真平さん、シトレさん、そして私がパネラーという形でディスカッションを行ない、セミナーを締めくくった。

セミナーを終えての感想であるが、全体的にもっと活気のあるセミナーができたのではないか。聞いている人を退屈にさせてしまったのではないかと少々気がかりである。ちょっとしたドラマをやってもよかったかもしれない。しかし目的は達成されたと思う。

1月28日

次の日、2人のボランティアがホテルに迎えに来てくれた。いよいよ日本を去る。わたしは前日、家に電話してボンギと話をした。

「今、地球の反対側から電話をしているのだ」というと、彼は「わかっている」と答えた。ああ、家族が恋しい。

今回の旅行（国際協力セミナー「女性が変えるアフリカと日本」）は非常にうまくオーガナイズされたもので、非常に楽しく過ごすことができた。これが有意義なものであったことを期待している。

［注］

◎グリーン・コープ

九州、山口、広島を中心に展開する16の生活協同組合の連合組織。消費者自身の手により、低農薬野菜や無添加食品などの商品を開発し、組合員に供給している。

◎杉浦剛さん

名古屋生活クラブと取り引きをしている農家。この団体は、安全な食品を手に入れることを目的として、愛知、長野、高知、山形などの農家と手を結んでいる。

◎大野和興さん

アジア農民交流センター代表。編著書に『食を奪いかえす』（共編著・有斐閣）、『現代おコメ大研究』（柘植書房）、『ゆれる自由化と食管－コメをどうするか』（共著・有斐閣）など。

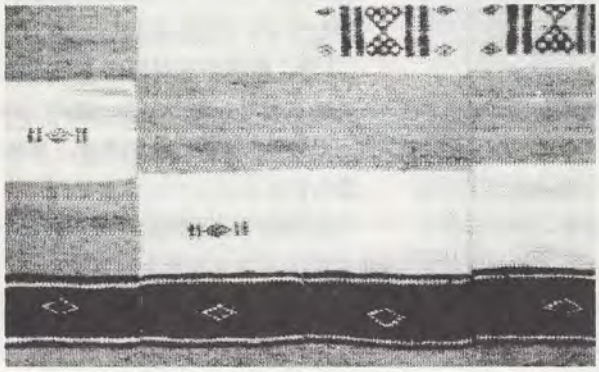
～布がつなげるアフリカと日本～

西アフリカの藍染めと泥染め

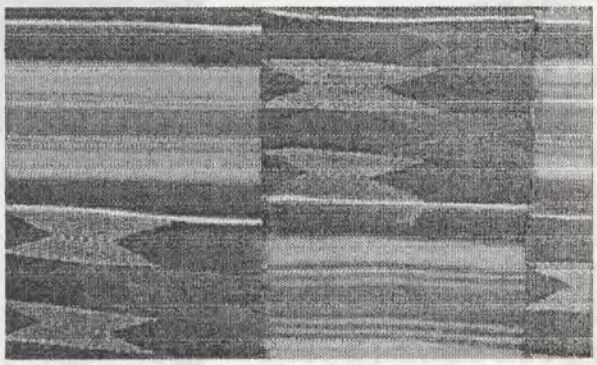
最近、人気が高まって、さまざまな催しが行なわれているアフリカの布の中から 4 枚を誌上展示。そして日本人には身近な色だった藍染めと、独特の味わいのある泥染めの工程をご紹介します。

西アフリカは染織が発達したところです

機械生産された布が出回り、化学染料が使われる現在も、いろいろな伝統的な染め物と織物が残っています。マリのフルベの人たちは羊ややぎの毛で大きな布(下の写真)を作り、南のガーナには多彩なモチーフで織り出した、気品あるアシャンティのケンテ・クロス(右の写真)があります。



藍染めは西アフリカの広い範囲で行なわれています(下の写真はマリのドゴン)。模様を出す方法には、絞り染めなどで布全体を染める場合と、糸を染めるかすり布があります。ナイジェリアに住むヨルバの人たちでは藍染めは女性の仕事で、ハウサでは職人組合に加入した男性が行ないます。彼らが染めた濃紺の無地の布をまとうことから、サハラの遊牧民は「トゥアレグ(青い人たち)」と呼ばれています。



ヨーロッパでインテリア・ファブリックとして愛好されているのが、濃褐色の泥染め(下の写真)。マリ南部でバンバラやドゴンの人たちなどが作っています。素材となっている厚手の細幅の木綿布を織るのは男性です。これをさまざまなサイズに縫いあわせて染めています。他の3枚の布も素材が毛であったり、厚さは異なっても、みな細幅で織られています(左の「毛布」が一番広くて、約 20cm)。

◇昨年 11 月東京で行なわれた企画展「西アフリカから届いた布と風景の小さな市場」における展示をもとにまとめています。この催しは、布の感触とその手法を通して、アフリカに近づいてもらいたいということが目的のひとつ。化学染料を注いで染めた藍の「浴衣」、そしてテーチ木で染めたところに泥染めを行ない黒茶色を出す「大島紬」が並べられました(主催　タムタム工房)。

藍染め

トーゴ共和国の湾岸部に居住するミナ族の藍染め調査をまとめた染織研究家、井関和代さんの報告論文(「西アフリカ・ギニア湾沿岸『ミナ族の藍染め』」同朋社)をもとに、作業を説明します。

イラスト 藤崎純子

●マメ科の藍植物「アホティ」は畑で自生している。乾季が終わり、植物が育つ雨季が始まると、女性たちは幼葉を採集。藍植物がない時にも染色ができるようにしておく。

●葉の軸を取り除き、ウスに入れて、キネでつく。黄緑色をしていた葉が、黒く変色していく。

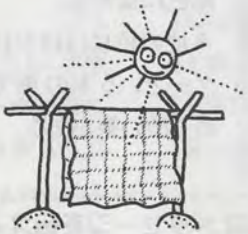
●直径5センチほどに丸める。日当たりのよい場所に並べて、夕方に取り込む。3、4日繰り返すと、4センチくらいに縮む。雨季が終わるまで、少量ずつ作っていく。

●藍の成分、インディゴを溶かすために草木の茎や芯を焼いて、灰水を作る(現在では苛性ソーダを使う藍染め業者が多い)。灰水を舌につけて、濃度を確かめる。

●カメに入れた灰水に藍染料を加える。ときどき棒でかき混ぜて、6, 7日たつと、藍色の泡ができてくる。大きなカメに染液と同量の灰水を加えて混ぜ、翌朝までおく。

●ラフィア・ヤシの繊維の糸で、かがり縫いをして、格子柄の幾何学模様を縫い入れていく。

●布を藍カメの中に入れる。縁と支柱で支えて円い板を脇に置き、その上に30分後に取り出した布を重ね、30分ほど空気に触れさせる。
黄色をしていた布が、緑、紺色と変化していく。カメに戻し約5分後に取り出す。



●染料を振るい落として、乾燥させる。この工程を約1週間繰り返す。

●糸を切って、取り除き、発色する。

●十分に水で洗った後、乾燥して仕上げる。

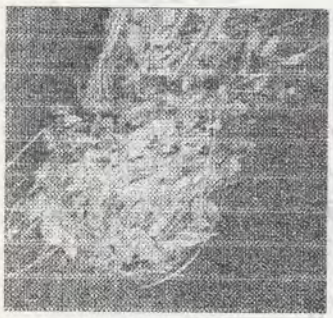
泥染め

根強い人気の布の製作について知るために、マリの首都バマコで作業を撮影した野澤眞次さんの工程写真を追ってみます。　写真 野澤眞次

◇お断り－

印刷物から複写しているため鮮明さに欠けています。(編集部)

●細幅の布を切り、つなぎ合わせて必要なサイズの生地にする。乾燥すると縮むので、つなぎ目は少し余裕をもたせておく。貫頭衣、ベストなどは仕立ててから染める。



●ガラマン(バンバラ語)という木の乾燥した枝葉を用意する。

＊ガラマンはマラリアの予防薬としても利用されている。

●なべに湯を沸かし、ガラマンを入れ約1時間煮る。これで地を黄褐色に染める。

＊地の色にはほかにベグーという木の葉で染める渋い茶がある。

●生地をガラマンの液に漬けて、手で絞る。十分浸透するようにこの工程を繰り返す。濃い色を出す場合は、回数を増やす。

●泥染めには、ニジェール河の底からとる鉄分を含んだ泥(ボゴ)を使う。作業場のカメに入れ、乾燥しないように水を張って、保存しておいたものを、必要なだけ取り出す。

●七面鳥の羽の根元などに泥を含ませ、下染めした布地に模様を描く。左の写真は、仕立てあげたベストに伝統的な模様を描いているところ。型で押したようにも見える。

●泥で描き終えたら自然乾燥させる。その後、水で洗って泥を落とすと、黄褐色の地に鮮やかに黒が染まっている。自然乾燥して、仕上げる。

＊シアーバターノキの実から作る石けんで脱色して、白い模様を加えることもある。

そのモチーフはいろいろなメッセージを伝えるものです －「アフリカ・マリ染織芸術展」(1992年・東京)図録より

提供 (株)ツルモトルーム ©1997 TSURUMOTO ROOM CO., LTD.

Ce farin jala

もしくは **ka kursi juru**

「勇敢な人間の帯」、あるいは「男性用のズボンの細紐」意味。折りたたまれた時にできるひだのことを思わせます。

Turusina

1つの意味は「基盤」と「寄り添う伴侶」。家庭の基盤を整えるためには、同じ財産を分かち合い、同じ関心に向き合わなくてはなりません。

(まとめ 佐久間典子)

6月、サッカー・ワールドカップ・フランス大会が開催されます。今回は、2大会前のイタリア大会でロジェ・ミラ選手が大活躍をして、アフリカの出場枠を増やすことにつなげた国、カメルーンから、豆のシチューをご紹介します。

一昨年末に短い日数でしたがこの国を訪れました。公用語は英語とフランス語の二つの言語。南部と北部では風景がかなり異なっていて、食事はバラエティに富んでいます。

主食のひとつ「クスクス」は、北アフリカの通常知られているパラパラしたものではなく、もさっとしたおもち状のものでした。また、キャッサバやじゃがいも、ヤムいも、ご飯、そしてマカロニなどのパスタもよく食べるようです。これらをソースと一緒にいただくというのがもっともポピュラーな家庭料理。ソースは魚、肉、さまざまな野菜で作ります。

辛いものも甘いものもどれもおいしく、食べ過ぎの毎日でした。(サッカーも大好きな獺)

豆のシチュー<カメルーン>

「African and Arab Cooking」のレシピから　協力 日本中近東アフリカ婦人会

●材料（6人分）

色つきの大きな豆（とら豆、ささげ豆等）	3カップ
トマト	2個
トマトペースト	大さじ2
たまねぎ	大1個
厚切りソーセージ	300グラム
にらねぎ（リーク）	大1本
にんにく	小さじ1
しょうが	小さじ1
干しえび	大さじ1
油	大さじ5
塩、ブイヨン（固形）	適量

●作り方

1. 豆を一晩または6時間水につける。
2. 豆を水洗いして、柔らかくなるまで煮る。
3. 油を熱し、薄切りしたたまねぎ、きざんだトマトを約10分炒め、塩味をつける。。
4. にんにく、しょうが、干しえびをつぶして加え、ソーセージ、ブイヨンを加える。
5. 豆を加え、約15分煮続けたらできあがり。
6. ご飯またはじゃがいもと一緒に供する。

（一部変更しています。－編集部）

『African and Arab Cooking』は日本中近東アフリカ婦人会が、創立10周年を記念して編集・発行した料理の本です。
日本にある材料で調理できてヘルシーな、79種類の料理の作り方が掲載されています。A5版／200頁／1500円
お申込先：中近東アフリカ部のウェブサイト https://sites.google.com/ncaf1981.org/ncafhp/ncaf%E3%81%AE%E6%9C%AC?authuser=0

上記新旧料理本は右記のお店でもお買い求めいただけます。直接お問い合わせください。田園調布PÂTÉ屋　http://pateya.com

ホームページ紹介

わたしもホームページを作りました
内容は、
1．アフリカに関する情報収集のためのリンク集
2．西アフリカをテーマにしたエッセイや情報
この2本を柱にしたいと思っています。
一度ご覧ください。
アドレスは **http://www02.so-net.ne.jp/~tunghat/**

また、西アフリカに関するメーリングリストも始めました。ガーナに留学している友人や、マリのトンブクトゥで活動しているNGOスタッフの友だちから、いろいろな話題を送ってもらう予定です。質問、参加者同士の話し合い、イベントの案内などによる楽しいメーリングリストにしたいと思っています。
http://www02.so-net.ne.jp/~tunghat/caas/sahelnet_ml.html

（福井慶則）

お知らせ

<<はみだし会員フォーラム>>

第1回　東京無駄話会開催

日時：7月20日（月）6時～
会場：未定（東京近辺、おすすめのお店を教えて下さい）
＊アフリカ好きの人もそうじゃない人もワイワイ楽しく話しましょう！　会員じゃない人も大歓迎！

＊東京以外でもぜひ同じ様なことを企画して下さい。

Aja Addy ダンス・ワークショップ＆ソロ・コンサート

Aja2001プロジェクトの一環として当日、物品販売で協議会も参加します。一緒に、参加しませんか。会員・非会員問いません。
日時：7月25日（土）15:00～
会場：YMCAアジア青少年センター
問合せ：事務局　奥田まで
＊イベントの詳細はイベントガイド参照

事務所を移転します

6月27日に事務所を移転しました。移転先は下記の通りです。昔なつかし丸幸ビルへ出戻りです。
〒110-0015
東京都台東区東上野1－20－6
丸幸ビル3F市民フォーラム気付け

＊電話番号は次号でお知らせします。
＊地図は総会資料16Pを参照下さい。

♪♪♪5～6月・事務局日誌♪♪♪

5月21日運営委員会。／5月23日～24日両国の江戸東京博物館で「地球市民フェスタ」が開かれました。あいにくのお天気でしたが、1日目は多数の来場者がありました。協議会も物品販売で参加。締めくくりは、B.B.モフランさんの歌とたいこで。お手伝いいただいた方、ありがとうございました。／5月25日会報37号の発送作業開始。平日の作業は人手が足りなくて、ちょっと大変。でも、思わぬ人が来て手伝っていただいで助かりました。／6月2日TICAD会合。事務局からは尾関、望月が出席。／6月3日運営委員会。／6月9日TICAD会合。／6月10日第2回砂漠化勉強会。／6月13日総会資料の発送。事務局で2人で作業開始。例のごとく当日資料が完成していない。事務局のプリンターが故障中のため、「JCA-NET」でプリントアウト。何とか終了しホッ。／6月18日運営委員会。新運営委員候補者も出席のため事務局は大にぎわい。

＜5月下旬～6月中旬事務局訪問者＞

会員の大島康彦さん、中場裕子さん、佐久間典子さん、鈴木直喜さん、廣内かおりさん、仲野桂子さん、外山由紀江さん、中野智之さん、望月克哉さん、久保英之さん、壽賀一仁さん、佐藤由規さん、楠田一千代さん、松谷曜子さん、河内伸介さん、その他にボランティア：高田敦史さん、黒沢美枝さん、松本幸花さん、来客者：帆足養右さん、田山幹子さん、鯉渕次雄さん

7月から事務局電話応対時間が変更します

月曜日から金曜日の2時～6時です。
お気軽にお電話下さい。

アフリカ日本協議会では活動を支えてくださる会員を募集しています

○協議会の主な活動
（日本国内向け）
・国内のアフリカに関する団体・個人のディレクトリー作り
・NGO活動に関する情報提供、広報協力、政府・国際機関との連絡調整
・アフリカに関する理解講座の開催、講師派遣、情報提供
・会報の発行
（アフリカ・欧米向け）
・現地調査
・国際会議への参加、政策提言
・NGOとの情報交換・連絡調整

○会員になってください！
会員には会報やイベントの案内、物品・書籍の割引などの特典があります。
年会費
正会員　1口　1万円
学生会員　1口　6千円
賛助会員　1口　5万円

○寄付金、会費は下記の講座にお願いします。
郵便振替
０００１２０－３－５７３２７６
アフリカ日本協議会
銀行口座
さくら銀行神田橋支店
普通口座３４９２６７８
アフリカ日本協議会

●編集後記　通い慣れた神田の商店街ともお別れ。新しさと古めかしさが同居する不思議な街でした。（葉）「地図オタク」は「あったらいいナ」と思っていた日本のNGOの活動対象国一覧ができてホッ。（tam²）日本代表1次リーグ通過だ！イングランドを倒し次はドイツだ！実はまだ6/17だぞ！（ToShi）総会、引っ越しと事務局はバタバタしているけれど、サッカーだけは見逃さないぞ！っというわけで寝不足の日々が続く・・・（MA坊）司教暗殺、核実験、空爆等、暗鬱なニュースが続く。何とか平穏にならんことを（獺）

●37号発送ボランティア：高田敦史、中場裕子、松本幸花、尾関葉子、奥田麻緒
●アフリカニュース翻訳ボランティア：古村伸子、牧野久美子、石川一喜
●38号にご協力または投稿をいただいた方：楠田一千代、中野智之、福井慶則、日本中近東アフリカ婦人会
●編集スタッフ：尾関葉子、佐久間典子、名畑剛、佐藤由規、奥田麻緒

転載・引用の際にはアフリカ日本協議会のMonthlyアフリカNOWが出典であることを明記下さい。